

シオンの花の恋物語

永畑道子



青春ノート 4

シオンの花の恋物語

永畑道子

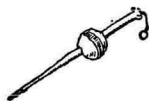
青春ノート 4



国土社

* 永畑道子（ながはた みちこ）

天秤座生まれ。南国育ちで、北に憧れ、小説を書くことを夢みて東京へ出ました。母と、毎夜オリオンの星をみることを約束して、母をなくした今も、空を見上げることが好きです。ピアノを弾き、銅版画を仕事とするふたりの子にめぐまれ、毎日書きつづけて生きています。



NDC 159

永畑道子

シオンの花の恋物語

国土社 1983

197p 20×16cm（青春ノート4）

シオンの花の恋物語（青春ノート4）

永畑道子 著

1983年10月15日初版 1刷印刷

1983年10月25日初版 1刷発行

発行者 長宗泰造

発行所 株式会社 国土社

〒112 東京都文京区目白台1-17-6

☎03(943)3721 振替 東京6-90631

印刷所 株式会社 厚徳社

©M. Nagahata —————〈検印廃止〉

ISBN4-337-29404-X C8315

シ
オ
ン
の
花
の
恋^こ
物^い
語
*
目
次



I 好きな人ができたとき

7

『草雲雀』 8

Kとの出会い 12

「……私は死にます」 21

からだのことを知った日 24

ゆう子からの電話 28

親と子のきずな 32

II 生きることの修羅場

39

三日間の家出 40

父と母の記憶 44

芙蓉の花とEのこと 50

しあわせの予感 53



III 男と女のかかわり

59

夜の飛行機 60

性のめざめ 63

T先生をめぐるでき事 65

軍国少女の憧れ 71

〃真実〃をつかむには 76

第五高等学校への入学 79

O教授の思い出 86

IV 都会の風が吹きぬける

91

かけ出し新聞記者 92

佐藤春夫、檀一雄さんと会う 94

宇野千代さんの華やかさ 101

東京からの風 104



上京の日 107

V
心のなかの天窓^{てんまど} 111

記念すべき年 112

青年寺山^{てらやま}修司^{しゅうじ}との交流 114

とつぜんの再会と死 121

心で書くもの 125

ほんとうの学問にふれて 127

私を支えてきたもの 133

はるか遠くを望むとき 139

失われた強さ 142

VI
胸^{むね}にひきつぐ炎^{ほのお} 147

維新^{いしん}のころの女たち 148

政治へのかかわり 151

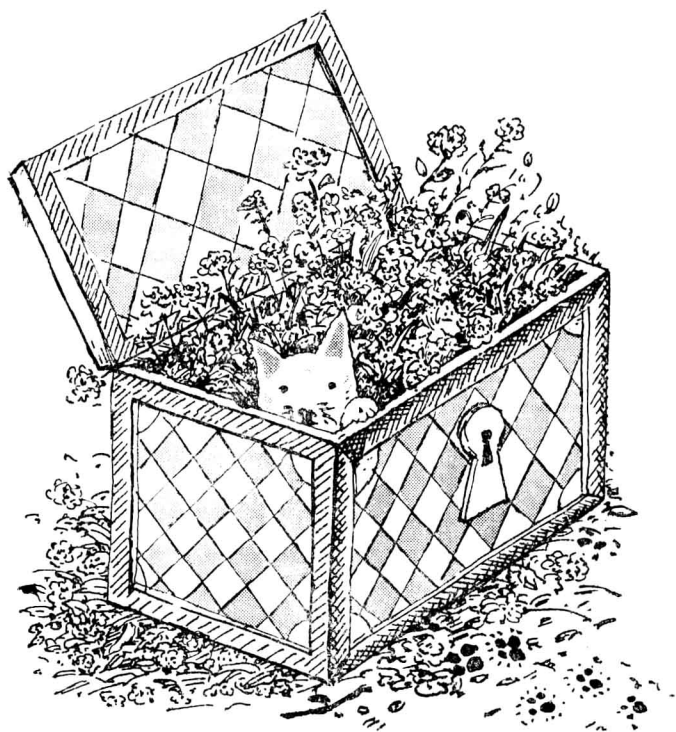


あなたに	197
親をかえる存在	194
命を生み出す力	192
女であることの意味	187
闇を破る力	185
二つの女の事件	180
自由恋愛事件	176
青鞥社の出発	172
「塩原心中未遂事件」	168
歌集『みだれ髪』	164
歌人、与謝野晶子	158
廃娼への動き	155



装幀 * 中島かほる
装画・カット * 永畑風人

I ^す好きな人ができたとき



『草雲雀』

山の上は ただまっ 青な空があるばかり

おそれることはないのだ 道子よ

私は十五歳さいになっていました。

太平洋戦争が終わったよく年、昭和二十一（一九四六）年のことです。九州、熊本市は、空襲くしゅうのために焼け野原になっていて、ところどころに家がぼつんぼつんと建っている、町を歩けばまだ焼けあとのにおいが、むんむんとたちこめるような、そんな時期でした。

町を貫流かんりゅうする白川しろがわの土手どてには、シオンの花がたけ高く生おいしげっていました。濃い紫むらさきの花の帯は、ようやく訪おとずれた、静かな夏を感じさせました。

食べものが不足していました。

焼けあとに生いしげるアカザの葉や、くきの部分を、野菜代わりにいため、壁かべ



土の材料になるフスマの粉も、練^ねって、ゆでて、主食にしました。道端^{みちばた}の花や草はすべて食べものにみえてしまうような、飢^うえた目を送っていました。

あるとき、姉と、買い出しに出かけたのです。口べらしのためもある、市の南部に住んでいる従姉^{いとこ}の家へ行くつもりでした。

汽車をおりて、大きな川のほとりにきました。橋はかかっています。対岸まで一本のつなが張^こってあって、小舟^{こぶね}がひとつ、おいてあります。つなをたよりに、ようやく舟をあやつって渡りました。

そこはもう、従姉が住む村でした。草がぼうぼうと生いしげる道を、ほっとしてたどりはじめたとき、道端の立て札^{ふだ}に気づきました。

「この先、出入り禁止」

かまわず歩いていくうちに、道をふさいでいるロープにぶつかりました。一枚^{まい}の紙きれが風に揺^ゆれていました。

「赤痢^{せきり}発生、消毒中」

姉と私は、何かに追われるように道を引き返し、必死^{ひっし}で無人の川を渡り、からっぽのリュックのままで、町へもどる汽車に乗りました。

当時、抗生物質こうせいぶつしつがまだ、ほとんど入手できなかったころです。赤痢せきりは、おそろしい病気でした。ものをいう元氣もなくて、家に帰りつききました。母にすがりつきたいような気持でした。

玄関げんかんを入ると、奥おくに来客の気配がしました。学生帽がくせいぼうがふたつ、左手の棚たなの上においてあります。

庭に面した縁側えんがわで、父が、客と応待している声がきこえました。久しぶりにきく、父の若わかしい声でした。

家が全焼してしまい、私たちは、父の友人の家を借りて暮らすようになっていたのですが、商売を再開する気が、父にはまったくなくなっていたのです。父は、終日机つくえの前にすわっていました。歌詠うたよみの父でした。ものを書きつづけて生きていくことが、父の心の底にいつもあったユメ、だったのでしょう。

家業は本屋でした。商売もしたくない、家は幸いにして焼けた、と、父はよく私たちに話しました。母は、そんな父の話をかなしげに聞いていました。

町外れはずれにあるこの住いで、本が売れるはずもなかったのですが、玄関にはそれほど本をおいて、母は何とか商売をつづけようとしていました。

生活のためのカネが、たぶん、底をつきはじめていたのだと思います。

ふたりの客は、父に、文芸誌発行の相談にみえたのです。

焼土の町に、若者を中心とした同人誌を出したい、誌名は、『草雲雀』とする、その発行代表人に、という話であったようです。

父は、水を得た魚のようでした。

ふたりの客が帰られたあとの、縁側。古びた籐イスにかけて、庭先の緑に全身染まっていた、黙思のままの父のすがたを思い出します。

『草雲雀』は二十ページ程度の薄い冊子でしたが、十代の歌詠みたちを集めて、若干二十歳代もいるという、みずみずしい文芸誌として、発刊されました。

その仲間に、Kがいました。

さいしょに、父のもとへあらわれたふたりの学生のなかの、ひとり。父に、若い息吹きを吹きこんだ人として、私にとっても、Kは大切な存在となりかけていました。

そのKから、あるとき、ラブレターをもらったのです。

Kとの出会い

ラブレターというよりは、恋文こいぶみといった方がふさわしいのかもしれませんが。

三好達治みよしたつじの、『花筐はながたみ』という詩集があります。てのひらに、すっぽり入ってしまいそうな、ま四角の、白い和紙で包まれた詩集のなかに、Kの手紙がはさんでありました。

なんと美しい贈りものだったことでしょう。飢えていて、着るものもろくな日々。進駐軍しんちゅうぐんからの救済物資きゆうさいぶしによるチグハグの洋服を身にまとい、制服は姉のおさがり、スカートのすそはツギはぎだらけのひどい身なりの私でした。宝石ほうせきのようなことばに出会いました。

まぶしい詩集と、恋文でした。

Kは、そのなかで、私を映画にさそっていました。何もかも焼けてしまった町に一軒けんの映画館がとつげんに建って、レンガ色の塔とうから吹き流しの宣伝せんでんの布をたらし、その文字は、私の家からも見えたのです。

「ラインの監視^{かんし}」というイギリス映画でした。その映画へのさそいです。

Kは、医学生でした。私は、女学校の三年生。ちょうどいまの、中学三年の年齢^{ねんれい}です。

何よりも、親には見せられない恋文^{こいぶみ}をどこにしまおうかと、苦しみました。自分の部屋などではなくて、廊下^{ろうか}のかたすみに私の机^{つくえ}がおいであります。

ミカン箱に布張りの机ですが、その布の下に手紙をしまいました。

そのころの女学校は、映画をみにいくときは、親同伴^{どうはん}という、きびしい規則がありました。外出するときも、かならず制服着用です。

その制服がたのまま、私はKとの約束^{やくそく}の場所へ出かけました。

映画館は、満員の人でした。広い熊本^{くまもと}の町の、ただそこしか、洋画の上映館^{じやうえい館}がなかったせいでしょうか。

Kも、学生服のままやってきました。はじめてのデートです。立ったまま、画面に視線を注ぐのですが、ストーリーは上^{うへ}の空のありさまでした。

すぐ横に立っているKが、私のからだをうしろから抱^だいたからです。全身がふるえました。この人は、危険な人だと思いました。

